

2006年7月21日

ザンビア出張報告

京都大学大学院農学研究科土壌学分野
真常仁志・宮寄英寿・野呂葉子

1. 目的

- ・ テーマ1の調査地の決定、土壌試料採取
- ・ Study Permit の取得

2. ザンビアでの旅程

6月11日 真常 ザンビア到着。6月15日まで、梅津さん・櫻井さんに同行
6月16日 宮寄・野呂 ザンビア到着。Immigration Office
6月18日 Lusaka-Petauke 移動
6月19～28日 現地調査
6月29日 Petauke-Lusaka 移動
6月30日 Immigration Office、Mt. Makulu Research Station
7月1～2日 Sinazongwe 訪問
7月4日 ザンビア出国

3. 現地調査

現地調査の内容は、大きく二つに分けられる。一つは、調査地の使用許可を関係者・関係機関から得ること、もう一つは、調査地の概要を知るための調査である。現地調査には、ZARI(Zambian Agricultural Research Institute)から Mr. Sesele Sokotela に同行してもらった。

3-1. 使用許可の取得

6月19日(月) DACO での説明

6月13日の Mt.Makulu での話し合いより Theme I で研究に使う土地の規模がかなり大きいため Petauke の DACO (District Agricultural Coordination Officer) を通じて適当なフィールド候補地の情報を得、地元の村長と話し合い理解と協力を得る必要があるとのコメントを得ていた。そこで、Petauke の DACO に寄るが不在であったため Mr. Sikombe (SAO: Senior Agriculture Officer、DACO の下で実務を取り仕切る立場にあるようだ) に研究計画を説明。更に、Mr. Sikombe に候補地の BEO (Block extension officer) である Mr. Davis Siwo を紹介してもらい、研究計画を説明。また、研究をはじめるにあたっての話し合いをどのように進めればよいかたずねた。

土地を用いての研究をするには、まず、Chief (Mr. Sandwe) にあつて了承を得る。その後、候

補地である Mwelwa 村の Headman (Mr. Dickson Banda) に許可をもらうのが一番よいと教えてもらう。Chief に会うために BEO に翌日同行してもらうことになる。

ここで、行政区分として District は Block、Camp、Zone の順に細分化される。Petauke District の場合は5つの Block に分けられ、候補地の Mwelwa 村は Chinika Block (Msanzara 川と Mawanda 川の間)、Mawanda Camp、Zone 1 に属する。一方、行政上の組織とは別に、Chief を長とする(民族的?)ヒエラルキーも存在するので、両系統に話を通しておくことが重要なようだ。

6月20日(火) Headman・Chief への説明

Chief の所在が不明確で、更に、Mawanda camp の CEO (Camp Extension Officer) である Mr. Johnson Banda が不在だったため、Mwelwa village の Headman をたずねた。

Headman と Camp Secretary の Mr. Dauglaus Chupa Banda と数人の村人の前で研究計画を説明した。その際、Headman から村人全員を集める機会を改めて設け、研究の説明するよう求められた。また、村人(Headman の兄弟)の葬儀のために Headman が同行できなかったため、代わりに Camp Secretary に候補地を見てもらった。

Chief が帰宅したとの情報を入手し、Chief の住居 (Palace と呼ばれていた) を CEO とともに訪問した。Mr. Sokotela が研究計画を説明し了承を得た。

6月28日(水) 村民への説明

Mwelwa 村の住人と Chinika Block 内の他村の Headmen に集ってもらい研究計画を説明するための meeting を開いてもらった。子供以外の男女ほとんどの村人が参加していた。また、CEO、Camp Secretary にも出席してもらい CEO には Mr. Sokotela が英語で説明する我々の研究計画を現地語で通訳してもらった。研究計画については Theme I でおこなう内容を説明し、今後調査地内での木の伐採などしないでほしいとお願いした。

研究計画を説明した後の質疑応答では以下のようなやり取りがあった。

・Chipela 村の Headman から「調査地はどのようにして決めたのか」と質問された。

⇒まず初めに、道路事情が良好で Petauke 近辺の森林を地図上で目星を付け、その後、現地へ赴き我々が求めている条件を満たすかどうかを視察したこと、候補地としては Gabriel village と Mwelwa 村があがったが、Gabrie 村は広域が確保できなかったため Mwelwa に決めたこと、を説明した。

・村人からは「肥料の配給はないのか」との質問。

⇒今回は調査であって、支援活動ではないことを告げた。

・村人から「調査によって、現在耕作している畑への影響はないのか」との質問

⇒「調査は、現在休閑地となっている場所で実施するので、影響はない」と回答

・我々側からは「調査地はどのくらいの期間耕作していないのか」と質問した。

⇒Mwelwa 村の Headman いわく、60 年代に開墾したものの数年で利用しなくなり、それ以来農耕地としては使用していないらしい。

3-2. 現地調査

6月21日(水)

調査地内の胸高直径 27cm以上の比較的大きい木をラベリングするとともに、GPS で位置情報を取得した。

6月22日(木)ー26日(月)

前日の植生調査の結果から、大木の存在する範囲をできるだけ広くカバーするように調査地を設定した(面積約 17ha)。調査地内で約 40m 間隔で土壌調査。計 100 地点。各地点で 100cc コアサンプラーを用いて 0-5cm、5-10cm の土壌サンプルを採取した。また、オーガーを用いて 50cm の深さまで 10cm おきに現場土性と現場礫含量を調べた。試料採取地点の位置情報は、GPS で取得するとともに、周辺に存在する大木 2 本からの距離もできるかぎり測定した。今後、精密な測量により大木の位置を同定すれば、土壌試料採取地点の位置もより正確に同定できる。なお、GPS により測定された2点間の距離とメジャーで測定した距離の誤差は、せいぜい1m程度であることを確認している。

6月27日(火)

22ー26日の調査の結果から調査地内の代表的な地点と森林と耕作地の境界線付近で土壌断面調査を行なった。

6月28日(水)

ラベリングした木に関して、村人の協力を得、現地名で同定を行なった。



調査地の様子



土壌断面

30cm からプリンサイトを多量に
含んだレキ層が出現



村人とのミーティングの様子